

コロナ禍でも「できること」を引き出したい！

～園芸・調理活動で生まれた自信と笑顔～

施設名： 西原敬愛園

発表者： 松本 美奈津（管理栄養士）

我如古 花観（管理栄養士）

【はじめに】

当園では感染予防の為、ドライブやカラオケ等を制限している。そのため、利用者は園での日常生活が長くなり、外部からの刺激が少なくなっていた。そこで今回、園で育てた野菜を使って園芸・調理活動を実施した。また、調理活動中の評価と介入前後に長谷川式認知症スケールを用いて評価を行った。以上の結果を考察し報告する。

【事例紹介】

氏名：S様、92歳、女性。 要介護1、

認知症高齢者自立度：II b、

診断名：混合性認知症、高血圧、両側大脳基底核皮質下ラクナ梗塞、右内頸動脈狭窄、胆摘後胆管炎

生活歴：伊江島出身。畑作業の経験あり。

【活動内容】

園芸活動：苗植え、水やり、雑草取り、収穫等

調理活動：（下記表にて提示）

実施内容	実施場所
セッション① しその味噌汁 ヨモギとしそのジュース	1階食堂
セッション② 島ラッキョウの葉・ひげ根取り 島ラッキョウの薄皮剥き	入所フロア
セッション③ 買い物に行く 購入食材と採取した野菜で ヒラヤーチー作り	外出 入所フロア

活動中はS様のペースを尊重、「教えていただく」という姿勢で取り組んだ。

【評価方法】

1、個人評価：（「料理療法個人評価表」2014 湯川・前田・明神）を一部参考

各セッション活動中に1～5段階評価で点数化

2、活動中の様子や言動観察、記録

3、認知機能評価：HDS-R 介入前後で評価

【経過】

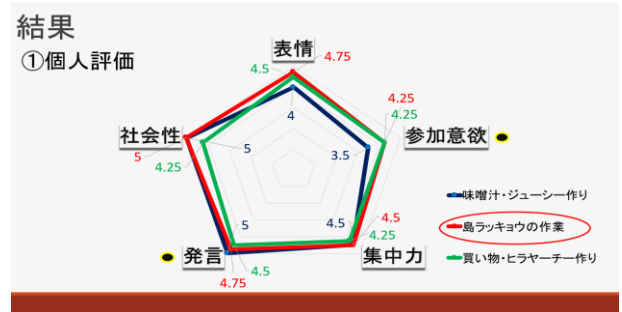
セッション①：収穫した野菜から調理。完成した料理を他の利用者、職員にふるまう。美味しいと目の前で食べてもらい嬉しそうであった。

セッション②：島ラッキョウの下処理を他の利用者とも実施。S様は慣れた手つきでこなされた。他の利用者も「若い頃、やっていたよ」と話される場面あり。

セッション③：〈近場〉〈人混みを避けた時間帯〉〈短時間〉での外出に、S様のご家族も同行。商

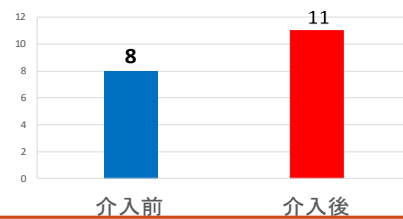
品を選ぶ際には「何人分作るの？」と考えながら吟味する様子あり。ヒラヤーチー作りでは入所フロアの利用者にふるまう。「みんな食べるから大きく作るよ」と発言聞かれる。

【結果】



結果

②長谷川式認知症スケール



【考察】

園芸を通し、自然に触れる事で気持ちがりフレッシュされ、なおかつ昔体験した「野菜を育てる」ことから、回想を引き出したと考えられる。セッション②が全体的に高評価であったことについては、なじみのある作業と、他者と体験の「共感」があったからであると考えられる。調理活動を通し、五感を使うこと、「他者にふるまう役割」、「褒められた」ことが脳を活性化し、料理ができた「自信」が成功体験として印象に残ったことが考えられる。

【感じたこと・まとめ】

- ・活動中のS様は普段よりも生き生きとされ、楽しんでいる様子があった。
- ・「やれる！」「できる！」がまだまだ秘められていると教えられた。
- ・深く知る・聴くことが「できること」を引き出し、QOLの向上に繋がると実感した。「その人らしく、楽しく過ごす」に寄り添えるよう、実践していくことが大切である。